

平成 18 年 4 月 13 日

社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 坂本 功 様

学校法人 文化学院  
理事長 松崎 淳 謹



拝復 時下ますますご清祥のことと存じ上げます。日頃、当学院の事業につきまして、ご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、3月31日付でいただきました「文化学院本館の保存に関する要望書」につきましては、今回の建て替え計画は文化学院の存続そのものをかけたものでありますので、以下のとおりご理解いただきますようお願い申し上げます。

85年の歴史と伝統を持ち、文化・芸術の分野で数々のすばらしい卒業生を輩出してきた文化学院も近年の少子化時代に適切な対応を図ることができず、極めて困難な経営状況に陥っておりました。昨年より経営に責任を持つこととなった新経営体制は、現在、文化学院の再建に全力を傾注し、多くの学生が集い、生き生きと学ぶことができる教育環境を整備するため諸施策を講じております。

文化学院の現在の建物は、耐震強度が十分でないこと、また、アスベストが使用してあるなど安全上重要な問題があることに加え、全体的に老朽化が進み、トイレ、冷暖房等の設備も古く、学生、教職員にも不便をかけています。年々の補修・維持経費も相当な額におよんでおります。

一方で、文化学院の東に隣接する浜田病院が地上14階建ての高層ビル建設工事を開始することになっており、その完成時には、当学院は高層ビルの影響を受け、日照の問題など教育環境が著しく悪化することになります。また、浜田病院の建設期間中は騒音等が発生し、本学院の授業にも相当の影響が出ることが予想されます。

以上のような状況に対し、文化学院理事会は、学生数の減少に歯止めをかけるため、早急に抜本的な対策を講じることが必要であるとの結論に至りました。

新校舎建設の構想段階では当然のこととして、保存の検討も再三試みしました。しかしながら、保存のために要する経費の負担が増大すること、学生数の回復を図るうえで早期の竣工が必要なことなどから、経営として、保存の方向での事業を考えることは、経済性、採算性の観点から困難であり、文化学院を存続させるという大命題のもとで、建て替えを行うことといたしました。

新校舎の設計は、当学院創設者西村伊作の孫にあたる、坂倉建築研究所所長坂倉竹之助氏に依頼し、学院の精神を継承した校舎設計をお願い致しました。建て替え計画立案にあたっては、アーチ、蔦、庭など旧校舎の持つイメージを尊重しながら、同時に町並み景観に対しましても最大限の配慮を加えており、当計画完成の暁には、駿河台地区の町並み景観にも十分に貢献するものと考えております。

今回の計画につきましては、教職員の賛同を得ていることはもとより、在校生およびその保護者の理解も得ているほか、多くの卒業生からの新校舎建設による学院の発展に期待するとの声が寄せられています。また、近隣、周辺住民の方々にも理解をいただいております。

文化学院として、現在の御茶の水の地に新校舎を建設し、時代に対応する教育の実現を図ることで、これまでの歴史と伝統に新たな時代を築き上げていく事業計画につきまして、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具